

カキ ‘甲州百目’ の大苗定植における初期着果管理

～福島県の「あんぼ柿」産地再生に向けて～

カキ ‘甲州百目’ の大苗を定植した場合、定植1年目から果実が収穫できますが、定植から少なくとも3年程度は摘蕾や摘果など、適切な着果管理を行う必要があると考えられます。

1. 背景と目的

本県でも干し柿用や置き熟柿として栽培されている‘江戸柿’は、正式な品種名は‘甲州百目’で、福島県では通称‘蜂屋’として「あんぼ柿」用に栽培されています。しかし、福島県では2011年に発生した東日本大震災に伴う東京電力福島第一原子力発電所事故による放射性物質汚染が原因で特産の「あんぼ柿」が加工自粛措置になりました。そこで、当県が開発した大苗による改植技術によって早期に産地を再生させるための実証研究を行いました。

2. 研究成果の概要

マメガキを台木にして‘甲州百目’の1年生苗を作り、大苗にしてからほ場に定植しました（図1）。



図1 カキ ‘甲州百目’ の大苗

定植1年目は1結果枝あたり1蕾に摘蕾したところ、生理的落果が多いものの、1樹あたり1個程度の果実を収穫できました。定植2年目は一部の樹で摘蕾を行わなかったところ、1樹あたり7個程度の果実を収穫できました（図2）。しかし、定植3年目には、前年摘蕾を行わなかった樹では着蕾数や収穫果数が少なくなりました（図3）。



定植1年目 定植2年目

図2 着果状況

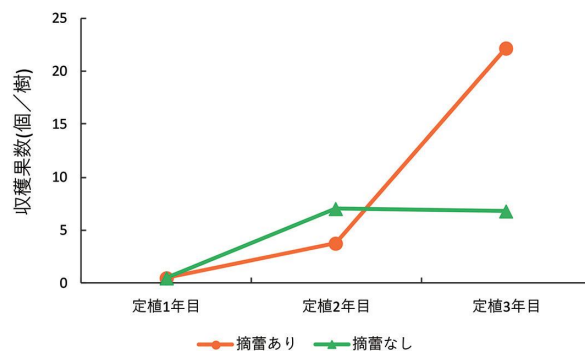


図3 着果管理と収穫果数

摘蕾を行わなくても生育が抑えられることはありませんでしたが、収穫量を順調に増やすためには定植後3年程度は摘蕾など着果制限を行う必要があると思われます。

3. 実用化に向けた対応

樹を植えかえることにより、果実の汚染程度が低くなるので、福島県では‘甲州百目’の改植が進んでいます。当県でも老木化した‘富有’の改植や‘刀根早生’の優良早生系統（通称‘上平早生’）への改植が進みつつありますので、この知見を参考に現地指導を進める予定です。

（果樹・薬草研究センター 杉村輝彦）